

【佳作】

世界を変えた少女、そして私たち

高崎 千実（福井県 福井県立藤島高等学校 1年生）

十五歳の夏。宿題と部活と学校の補習に追われて、私は慌ただしい毎日を過ごしている。夏休みなのに全然いつもと変わらないなあ。そんなことを考えながら今日も机に向かう。マララがタリバンに撃たれたとき、彼女は私と同じ、十五歳だった。

今、私たちは当たり前のように学校に通い真剣に（時に眠い目をこすりながら）授業を受け、友達や先輩と話し（時に些細なことでも喧嘩をし）何の変哲もない毎日を送っている。私たちにとって「学校」とはごく普遍的な存在だ。何人かの人にとっては、やりたくもない勉強を強いられる煩わしい存在かもしれない。しかし、パキスタンの生徒にとっては違う。彼らにとって、学校は「天国」なのだ。しかし、その天国もタリバンという悪魔によって消されてしまった。「結婚して家庭に入る女子に教育は必要ない。」「女に夫の付き添いがないと外を出歩いてはいけない。」「なぜならそれは「道徳に反する行為」だから。タリバンの命令には背けない。もし違反すれば、裁判にかけられたり、公開打ち刑に処されたり、最悪の場合命を失うことになる。以前から教育を受けられない子供たちが多いことは知っていたが、「女性だから」という理由でなぜここまで迫害されなければなら

ないのか私には到底理解できなかった。いったい今を何世紀だと思っているんだろう？なぜ男性のほうが女性よりも優れていると断言できるの？道徳に反する行為をしているのはむしろタリバンのほうでしょう？許せない。そんな理不尽な理由で何人も人が犠牲になるなんて考えられない。私の心の中に、怒りがふつふつと湧き上がってきた。だが、私はふと思った。もし、私がパキスタンの女の子だったら、同じことが言えるだろうか。強大で残酷なタリバンを前にして、多くの人の反対を押しきって声を上げることは果たして可能なのだろうか。もし声をあげれば、すぐにタリバンの標的になってしまう。自分の命を投げ捨ててまで正義を訴えることなんて私だったらできない。私はクラスの数十人の前でさえ自分の意見を言うのをためらってしまいくらいなのだ。しかし、マララは違う。彼女はすべての女性や子どもたちのために立ち上がった。私と同じくらいの年齢の女の子が世界を相手に戦っている。その事実を知って私は尊敬の念を抱いた。彼女のあきらめない精神、そして彼女の揺るぎない勇氣に。

「さあ、殺したいなら、殺していいわ。」

私がこの本を読んで、一番心に残ったマララの言葉だ。タリバンに狙われていることを知っても、彼女はひるまなかった。彼女の天国である学校を守るため、将来の夢に向かって進む道を断ち切られないための彼女の信念はとてつもなく熱い。誰もその炎を消すことはできないのだろう。彼女だって、死が怖くないはずはない。いつどこにタリバンの戦闘員やテロリストが紛れ込んでいるかも分からないのだから。そのような状況にあっても、恐怖を乗り越えて言葉の力でタリバンに立ち向かう彼女の凛々しい姿に私は感動した。タリバンに銃で撃たれた後も、彼

女は恐れることなく活動を続けた。銃弾は彼女の体に一生治らない傷を残したが、彼女の志にはかすり傷すら与えることすらできなかったのだろう。彼女の雄姿と希望は永遠に変わらさず語り継がれる。そして、その声は世界中の人々の願いとなって、あらゆるところに広がっていくはずだ。

本を読み進めていくうちに、一つ気づいたことがある。偉大で勇敢なマララも、実は普通の女の子であるということだ。この本を手取るまで私はテレビと新聞の中でしか彼女を見たことがなかったため、彼女の日常は想像がつかなかった。彼女も私と同じように、テストで良い成績を取るために夜遅くまで勉強し、兄弟とたわいもないことで言い争い、面白いテレビ番組にくぎ付けになっていた。私には手の届かない英雄だと思っていたマララが、手を伸ばせば届くほど身近な存在に感じられた。彼女と私には多くの共通点がある。彼女は決して雲の上の存在ではないことを実感し、彼女への親近感は大きく膨らんでいった。一人の姉として、一人の生徒として、そして、一人の女の子として。

「二人の生徒、一人の教師、一冊の本、一本のペンが世界を変えられる。」

これは彼女が人々に送ったメッセージの中で最も有名なものの一つだろう。私はマララから数えきれないほど多くのことを学んだ。どんな困難や壁に直面しても逃げないこと。真理は必ず嘘に打ち勝つこと。暴力ではなく、平和と話し合いで立ち向かうこと。彼女が女性と子どもたちの権利のために活動を始めたのはわずか十歳のころ。だとしたら、十五歳、十六歳の私たちが何もしないでおかしい。わたしたちは、一人の生徒として、世界を変えられるはずなのだから。

書名…マララ 教育のために立ち上がり、世界を変えた少女
著者…マララ・ユスフザイ・パトリシア・マコーミック